

昭和60年度 一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)

埋蔵文化財発掘調査報告書

# 坂 尻 遺 跡

1986. 3

建設省中部地方建設局  
静岡県教育委員会  
袋井市教育委員会

昭和60年度 一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)  
埋蔵文化財発掘調査報告書

# 坂 尻 遺 跡

— 第 6 次 調 査 —

1986. 3

建設省中部地方建設局  
静岡県教育委員会  
袋井市教育委員会

## 例 言

1. 本書は昭和60年8月1日から昭和61年3月31日まで実施した一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書『坂尻（さかじり）遺跡第6次調査』である。
2. 本調査は建設省中部地方建設局長を委託者とし、袋井市長を受託者として、袋井市教育委員会が実施したものである。
3. 発掘調査は吉岡仲夫、永井義博（袋井市教育委員会）が担当した。
4. 本書の執筆・編集は永井義博が行った。
5. 本調査、報告書作成にあたり寺田義昭氏（静岡県教育委員会）のご指導を得た。
6. 本調査及び資料整理参加者は次のとおりである。（敬称略）  
渡辺菊男、大橋庄一、川島良一、大庭嘉平、三浦久雄、佐藤好孝、大庭泰子  
白井洋子、三浦とく江、寺田妙子、内山笑子、鈴木敏子、山崎雪江、早川保子
7. 調査資料はすべて袋井市教育委員会で保管している。

# 目 次

|      |           |   |
|------|-----------|---|
| I    | 調査に至る経過   | 1 |
| II   | 地理的・歴史的環境 | 2 |
| III  | 発掘調査の方法   | 3 |
| IV   | 発掘調査の経過   | 3 |
| V    | 調査体制      | 4 |
| VI   | 遺 構       | 5 |
|      | a. 第1次調査区 | 5 |
|      | b. 第2次調査区 | 6 |
| VII  | 遺 物       | 6 |
| VIII | まとめにかえて   | 7 |

## I 調査に至る経過

国道1号線袋井バイパスの建設に際して、路線内に周知の遺跡が存在することはすでに知れていたがこれらがすべて集落跡でその性格及び範囲はつかめていなかった。昭和53年度に路線内の遺跡について再度、分布調査が実施され次の三つの遺跡が所在することが確認できた。

1. 石ノ形遺跡（袋井市国本本地内）→坂尻遺跡
2. 鳥居裏遺跡（袋井市国本本地内）
3. 上橋遺跡（袋井市土橋地内）

やがて、坂尻遺跡の所在する袋井市名栗、北原川地区は原野谷川にかかる同心橋の架け替え工事のため先行して用地買収が進み昭和56年度より工事に着手する運びとなった。このため、静岡県教育委員会、建設省中部地方建設局浜松工務事務所、袋井市教育委員会の三者は協議を重ね、坂尻遺跡の取り扱いを全面発掘調査とし半永久的に地下に埋没する遺跡の記録保存に全力を注ぐこととした。しかし、坂尻遺跡は地表での分布調査によると数時代にまたがる複合遺跡で、またその立地も原野谷川の自然堤防上からはやはずれるなど不明な点が多かった。このような保存良好で範囲の不確定な遺跡をいきなり全面調査することはたいへんに難しいため遺跡の性格を明らかにする確認調査を実施することとした。

第1次調査（確認調査）は昭和55年12月18日から昭和56年3月31日までの寒中について実施され遺物包含層の状態、規模、厚さ等の平面調査を実施するうえで必要な基礎資料の採集にとめられた。この結果、坂尻遺跡の面積は名北地区工事区域内約8000㎡にあたり、遺物包含層は平均厚さ60cmでⅡ層、Ⅲa層、Ⅲb層と少なくとも三つの生活面を持つてつものない遺跡であることが判った。遺物は古墳時代中期から近世に属するものまであり遺構とともに複雑に重なり合っている。また、奈良時代の様相は単なる集落跡とは考えにくい遺物（墨書土器）や遺構（溝、趾立柱建物跡）から成り積重な発掘調査の必要性を感じた。このような結果から、当初考えていた丘陵末端部に位置する石ノ形遺跡とは別の遺跡と考え、地元の小字名をとって坂尻（さかじり）遺跡として本調査に望むこととなった。

第2次調査は以上のような確認調査の結果をふまえて昭和56年4月1日から昭和57年3月31日までの期間で、昭和57年度より工事着手が予定されている現国道1号線南側（約4500㎡）の調査が実施された。第2次調査では古墳時代前期の古式土師器の出土及び溝状遺構、土壇状遺構が検出され、古墳時代後期の遺構では祭祀的な遺物も出土している。奈良時代の遺物では、和同開珎、鈔帯具、銅印「松」、分銅などの金属製品や木簡、墨書土器（「佐野厨」、「玉郷長」、「日根」、「朽辺」、「山科」、「石田」、「西田」）そして趾立柱建物跡群が検出されたことから官衙的性質の遺跡の可能性が高まった。

続いて第3次調査は昭和57年4月1日より昭和58年3月31日にかけて現国道1号線の北側の約3500㎡の発掘調査が実施された。この調査では古墳時代の遺構・遺物の広がりには調査区全域に及ぶことが再確認され4世紀から7世紀に及ぶものと考えられる。S字口縁付甕を含む一括資料や、S D23の和泉期の一括資料など今後の検討が必要である。その他、古墳時代後期の

遺物も良好なものがあり地方官衙成立のベースとなるべき古墳時代の資料である。奈良時代の遺構は新たに18棟の掘立柱建物を確認され第2次調査のものと合せて33棟となる。墨書土器も新しく「日根野家」「市」「大上日請野家」「驛富」「佐野野家」「驛長」「三年水鉢 驛」など重要な遺物が出土している。

第4次調査は昭和58年10月1日から昭和58年10月31日まで実施された。これは現国道下を横切る地下道にあたり今回は南側(30㎡)北側(28㎡)の入口部分の調査である。面積は狭かったが台付甕、甕、長胴甕、壺、把手付壺形土器、坏類などを含む7世紀初頭の一括遺物が検出されている。

第5次調査は昭和59年9月3日から昭和59年12月6日まで実施された。これも現国道下を掘るという非常にたいへんな調査であったが古墳時代、奈良時代の良好な遺物を出土している。

以上第1次調査から第5次調査の概要を述べてきたが本年度はバイパス調査の最終年度ということでダイワハウス(株)中部工場協同1バイパス拡張部分約3000㎡を調査する予定であったが、予定を変更して太郎平新道と国道1号線が交差する地下道部分と大井川用水の付け替え工事による発掘調査を実施することとなった。これにより国本交差点より西側=ダイワハウス工場内及び国道北側の水田は買収が完了する来年度以降の調査となる。

## II 地理的・歴史的環境

坂尻遺跡は、袋井市街地から約4km東進した掛川市との市境付近である袋井市国本173の1番地他一帯に位置する。ここは油山寺一帯に広がる可睡・油山丘陵(最高115.2m)の南東端にあたる。この丘陵は小笠原層(泥層と礫層の厚い互層)とその下に不整合で横たわる曾我層群(下部礫層、中部凝灰質砂・泥層、上部砂層)よりなる。いずれも走向、傾斜が北西―南東、南西へ5~10°落ちの単斜構造をなし、丘陵内には沖ノ川支流のつくる大小多数の谷が発達し、尾根筋―谷筋が複雑に分布する。(加藤芳朗1985『坂尻遺跡―自然科学編―』)また、遺跡のすぐ東側は掛川市八高山を源とする原野谷川が吉岡の丘陵にそって南下し大きく西に流れを変るところである。この変換点あたりは、掛川市から流れてくる逆川、垂木川等の合流点でもある。(第3、4図参照)

河川の周辺は肥沃な沖積平野で、砂層、泥層、礫層が交互に厚く堆積しており、上流の山地で掛川層群と呼ばれる上部新第三系泥砂礫層からなる低地性丘陵を解析してきた結果である。

現在の坂尻遺跡周辺は河川改修によって現原野谷川の流路は南西向に直進するが、原川、徳泉、上賀名にはもとの蛇行流路の跡が残っている。このような蛇行流路の発達はこの付近の川の流れがゆるやかだったことを示すものである。加藤芳朗氏は坂尻遺跡の調査で遺跡内をかつて流れた旧流路「古名栗川」の存在を指摘し、その流路の両側の自然堤防上(礫層)に古墳時代の坂尻遺跡のムラがあったことを推定した。これは古墳時代の坂尻遺跡のムラの範囲をつかむうえでも、また集落形成の過程を知るうえでも非常に重要なことであった。(第5図参照)

今回の出土遺物の中心である古墳時代の後期にはこの自然堤防上にムラが営まれ、遺跡西側

の後背湿地に位置する水田地帯を生活範囲としていたのであろう。また坂尻遺跡の北へ220 m 入った谷は有名な「菅ヶ谷横穴群」の墓域である。現在はこの横穴群は袋井ゴルフ場の敷地内でわずかにその姿をのぞかせているが、かつてはこの平野に栄えたムラの「奥津城」となっていたと考えると古墳時代の坂尻遺跡周辺の開発の早さが十分推定できるであろう。

### Ⅲ 発掘調査の方法

発掘調査は、第1調査区、第2調査区とも4 m×4 mのグリットを設定し、それを基準に調査を行った。グリット名は東西方向を西よりA、B、C、Dとし、南北方向は北から1、2、3、4とした。そしてアルファベットと数字の交差によりグリット名とした。(例：A1)

現地作成図面は基本的には1/20とし微細図は1/10または1/5とし、地区全体図等は、1/40とした。

発掘調査は国道盛土や構築物を重機で排除し、遺構面直上より作業員の手作業により発掘をしている。周囲は土砂のくずれを防ぐためコンパネを土止め用に張り、その内側に幅50cm、深さ50cmの排水溝を設け、調査区の端に集水ますを設置し水中ポンプを 작동するようにした。また、仕事の能率をあげるためベルトコンベアを用意し排土した。

写真撮影は、中型カメラ(マミヤRB 6×7)、小型カメラ(ニコンF、ニコンFE)を使用した。撮影には脚立、ローリングタワーを使用した。

### Ⅳ 発掘調査の経過

昭和60年8月1日～5日

本日より第1調査区の発掘調査開始。発掘調査用仮設プレハブ、仮設トイレの準備。発掘器材の搬入などを行なう。現地は工事当局により国道の盛土はほとんど重機により除去されたが、約30cmほどの盛土の残りが遺構面上に残っている。この盛土である山土に手こずって予定がやや遅れぎみである。暑い日がつづく。

8月6日～8日

盛土の除去を終り第1層から掘り下げていく。遺構ははっきりしないが、中世・近世の陶器片が若干出土している。猛暑である。

8月9日～13日

第1層では遺構面がはっきりしないため、思い切って下げる。第2層の掘削である。遺物は非常に少ない。

8月14日～15日

お盆休み。

8月16日～17日

第2面で検出した溝状遺構(SD1～4)を調査する。比較的新しい遺構らしく遺物は少

なく完振。17日には写真撮影。実測用の糸張りを行なう。

8月19日～26日

遺構の平面図作成。レベルを入れる。土層断面図を作成後、調査区周辺の地形測量。これで第1調査区を終了。

昭和60年9月7日～10日

本日より第2区調査開始。昨日まで旧大井川用水路の撤去がおこなわれ現場にはまだコンクリートブロックが残っている。用水路だったため周囲からの水の流入が激しく排水におわれている。内部に残ったヘドロ状の残土を撤出し排水溝、集水ますを作る。遺構確認の後、わずかに残った Pit の実測、写真撮影を行なう。

10月11日～12日

ふくろい祭（祭典）のため休み。

10月14日～19日

遺構等の平面実測。断面図作成。周囲の地形測量をして完了。

## V 調 査 体 制

### ◎調査計画

建設省中部地方建設局 浜松工事事務所

### ◎調査指導

静岡県教育委員会 文化課

### ◎調査主体

袋井市教育委員会

教 育 長

鈴 木 勲 一

社会教育課

課長兼文化財係長

金 原 久 雄

学 芸 員

吉 岡 伸 夫（発掘調査担当者）

学 芸 員

永 井 義 博（発掘調査担当者）

学 芸 員

松 井 一 明

板尻遺跡発掘調査事務所

調 査 員

吉 岡 伸 夫

調 査 員

永 井 義 博



## VI 遺 構

### a. 第1調査区〔第6図〕

かつて国道1号線と旧東海道が原野谷川に架かる同心橋を渡るため合流した交差点のやや西側の現道下である。国道の盛土を切り取った断面を見ると昭和36年に国道1号線が完成した当時は未舗装で、雨上りなどは国道を走るトラックが次々にぬかるみにはまって立往生したという地元の人々の話が思い出される。国道の断面は最上部にアスファルト舗装が2層または3層あり、その下に厚さ15cmぐらいのコンクリートの板が敷かれ、その下が山土の盛り土である。旧地表面は水田または茶園の上と思われる耕作土が残っており作業員による調査面から下の包含層は次のような堆積である。（第6図参照）

第1層 円道盛土の砂礫土がかなり混る黒灰色粘土層。旧耕作土である。

第2層 灰色粘土層。旧耕作土の下部である。

第3層 かん鉄をわずかに含む青灰色粘土層。

第4層 砂混りの黄白色土

第5層 黄白色砂質土

第6層 砂層

第7層 黄白色砂質土

第8層 黄白色砂質土

第9層 黄褐色砂を含む粘土層

第10層 礫層

第11層 青灰色粘土層。かん鉄を多量に含む。

第12層 青灰色粘土層。この下はずっと礫層のようである。（ボーリング棒の調査による）

この付近は第1次調査のおり国道両側に確認トレンチを入れた際には遺構、遺物をほとんど検出されず版瓦遺跡の東限からはずれていると判断された。事実、今回の発掘調査でも古墳時代、奈良時代の遺構、遺物にはあらず、中世の遺構がわずかに検出されたのみである。しかし、今回の調査区の南側でケーブル埋設工事の時（第5図のC）に弥生時代中期の土器が出土したということは、今回の調査結果を合せて見ると国道より南の自然堤防上にはなんらかの遺構・遺物がある可能性を示すものであろうか。

### SD 1

第1調査区の北西隅に位置する自然の溝跡である。覆土は黄白色砂層で断面図のNo.5、6、7、8がこれにあたる。北東から南西に向けてだらだら幅を広げていく。

### SD 2、3

この2本の溝は平行して流れている。遺物もほとんど出土せず若干混入した陶器片も小さい。中・近世の遺構である。

### SD 4

調査区の南西コーナーにわずかにかかる溝跡である。

#### b. 第2調査区〔第7図〕

第2調査区は大井川用水路の付け替工事に伴ない実施された。設計図によると用水の底部より数センチメートル遺物包含層が残っている予定であったが実際に重機で掘削してみると予想以上に基礎工事がしっかりなされており丸太杭や大きな丸石がぎっしりと入っていた。このため遺構はすべて完全に破壊されており、わずかに残った土壌SK1も土壌の底がわずかに検出されたのみで本来の大きさではない。先に述べたように旧用水の工事で大きく包含層が失なわれているため土層堆積状態は確認できなかった。

#### SK1

確認面から底部まで、わずか数センチ残っているだけである。長径80.0cm×短径70.0cmであるがもちろん実際はもう少し大きな土壌であろう。土師器を出す。

## VII 遺 物

以上のように包含層、遺構のほとんどは破壊もしくは範囲外のため遺物の出土量はきわめて少ない第8図に紹介した遺物のうち、須恵器5点、土師器7点であるが、どれも1/8、1/6個体の少片である。

1は第2調査区北側の最下層から出土した少破片である。二重に屈曲する口縁部の内外面に櫛状工具による刺突羽状文を施した広口壺の少片でいわゆる柳ヶ坪型の甍形土器である。これは愛知県知多郡横須賀町の柳ヶ坪遺跡出土土器を標式遺跡としている、いわゆる「柳ヶ坪型土器」である。

2、5、6は第2調査区の旧大井川用水路の排土中から採集された土師器の坏身である。7も同じく排土中より採集された甕の把手部分である。

3、4の土師器の坏身は第2調査区北側のSK1から出土した坏身である。遺構に伴う資料と考えていいと思う。

8、9も同じく排土中より採集された須恵器坏蓋である。

10は第2調査区北側の最下層から、11は排土中より採集された坏身である。

12は第2調査区南側の最下層から出土した広口壺の破片であるが、南側は旧大井川用水路の基礎工事がかなり深く入っており層位的には安定していない。

その他、図示しなかった遺物にはやはり古墳時代の土師器の小片が多く、それ以外は中世・近世の陶器片が多いようである。坂尻遺跡の古墳時代の土師器は川江秀孝氏の編年によるとそのⅢ期にあてはまり、これは須恵器の遡考研編年のⅡ期とⅢ期前葉にあてはまるとのことである。(川江秀孝「西部地方の6～7世紀の土師器」『古墳時代の土師器』静岡県考古学会1985年)

## VIII まとめにかえて

板尻遺跡の重要性については昨年度刊行された『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書 板尻遺跡—古墳時代編、奈良時代編、平安時代編、自然科学編—』の中で五島康司、吉岡伸夫、前田庄一の各執筆者と特別調査員の諸先生により十分に説かれている。そして今年度調査分は面積も少なく調査地点も遺跡の中心からはずれるため補足的な調査ととらえていただきたい。しいて本年度の結果を上げるとすれば、国道1号線と太郎平新道の交わる地点より東側には袋井市教育委員会の範囲確認調査の結果のとおり若干の出土遺物はあるが板尻遺跡の中心となる古墳時代、律令期の遺構を検出することはできなかったであろう。これは地形的にもここまで東にくると原野谷川の影響を直接に受ける地点で、遺跡範囲のほとんどが水田をはじめとする後背温地に向う場所になっているのに比べると、今回の調査区の周囲は茶畑となって自然堤防上であることは確実であった。加藤芳朗氏が原野谷川の蛇行流路の跡を各地で指摘しているが、古墳時代、奈良・平安時代から現在に至るまでこの暴れまわる原野谷川は各時代にわたって板尻遺跡の人々の生活をおびやかしたであろう。実際に、今年度調査した付近にも人々の生活跡が本来はあったのかもしれない。しかし、この一帯に残る砂層や礫層は板尻遺跡の人々に対する原野谷川の攻撃のあとかもしれない。このことを考えると、可睡・油山丘陵から南東に伸びる遺跡北東側の支丘陵はこの暴れ者から長年にわたって板尻遺跡の繁栄を守ってきた自然の大堰堤であった。現在もこの支丘陵に残る原野谷川のツメ跡は生々しく、東名高速道路南側の宇佐八幡宮の境内東側にある宇佐八幡宮古墳（全長30m、前方後円墳）などはその下を大きくえぐり取られ墳丘の形さえ変えてしまっているのである。以上のようなことから今回の調査では従来から言われてきたように板尻遺跡の位置を東西交通の要所としてだけでなくその占地の優位性がこの遺跡をこれほどにまで大きくしたということである。やはり人々の生活の基本は農業をはじめすべてのことにとって水が大切であるが大河川の近くは以面、洪水などの危険も多い。その地で4世紀から始まったと考えられる板尻の「ムラ」は6世紀になると河川の水を水田の灌漑用に十分使いこなせるようになった。そして人々はやがて北丘陵上にその奥津城を築き、律令期に入ると東西交通の要として、またこの地域を統率する要としてある時は原野谷川の水運を利用して、またある時は旧流路が残した微高地上を使って活動してきたのであろう。約6年間にわたる板尻遺跡は発掘で出土した各々の時代の顔に自然科学的なアプローチを加え、いままで別々に見えたもの、考えたものが次々に1つの糸につながって大きな歴史の流れとして私たちの前に姿を見せたのである。これからは私たち袋井市民がこの成果をいかに活用できるかにかかってきている。

（袋井市教育委員会 永井義博）

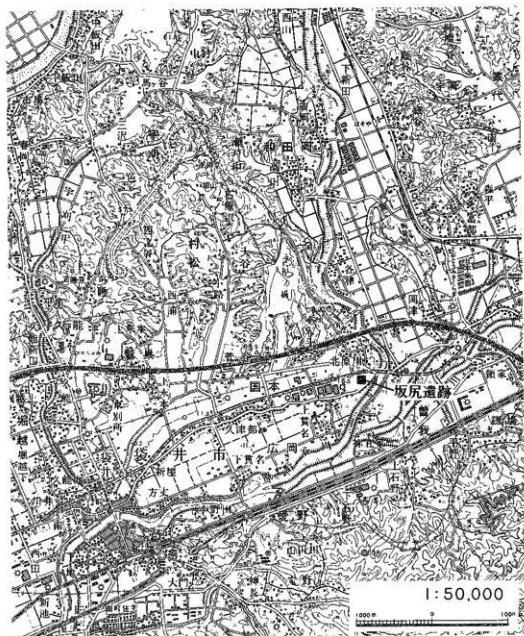
本年度の報告書を作成するにあたって印刷遅れ等の理由により過去に刊行されるはずの板尻遺跡関係の報告をすべて参考文献として使用することができなかった。よって過去の報告と記述違いがあった場合は過去の年度ごとの報告を尊重していただきたい。

# 参考文献・引用文献

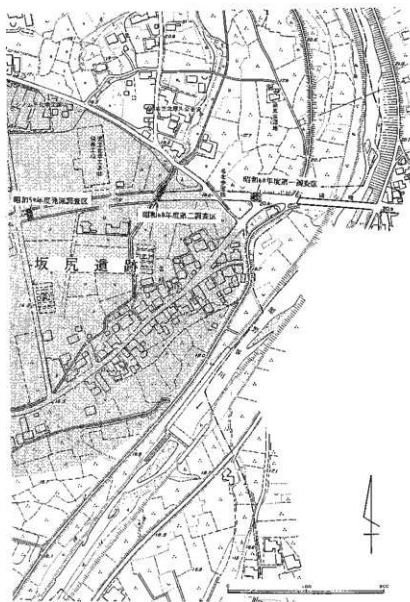
- 1981 袋井市教育委員会他 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書 一板瓦遺跡第1次調査一』
- 1982 “ 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報 一板瓦遺跡第2次調査一』
- 1983 “ 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報 一板瓦遺跡第3次調査一』
- 1984 “ 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査概報 一板瓦遺跡第4次調査一』
- 1985 “ 『一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）埋蔵文化財発掘調査報告書 一板瓦遺跡 自然科学編一』
- 1983 袋井市教育委員会 『板瓦遺跡 一昭和57年度轉入庭塗装工場北原川作業所建設工事に伴う緊急発掘調査概報一』
- 1985 “ 『板瓦遺跡 一昭和59年度緊急発掘調査概報一』
- 1979 静岡県考古学会 『須恵器一古代陶質土器一の編年』 静岡県考古学会シンポジウム2
- 1985 “ 『古墳時代の土師器』 静岡県考古学会シンポジウム6

插图





第1図 板尻遺跡位置図



第2図 坂尻遺跡と発掘調査位置  
(遺跡範囲は推定)

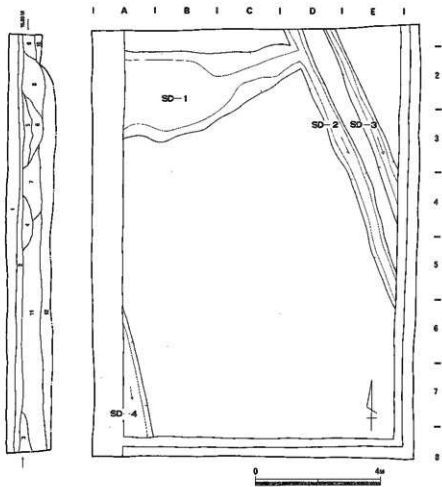




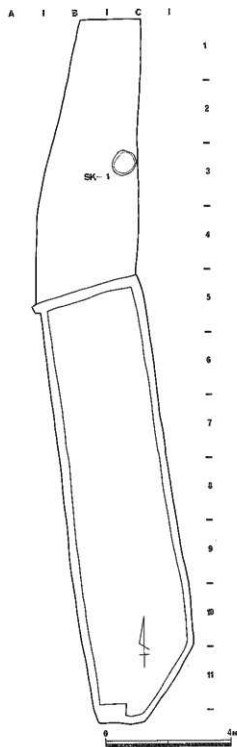
第3図 原野谷川・太田川流域の地形・地質図

(加藤1985『坂尻遺跡—自然科学編』より)

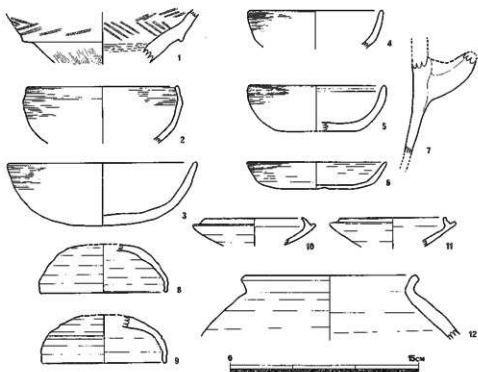




第6図 第1調査区平面実測図



第7図 第2調査区平面丈測図

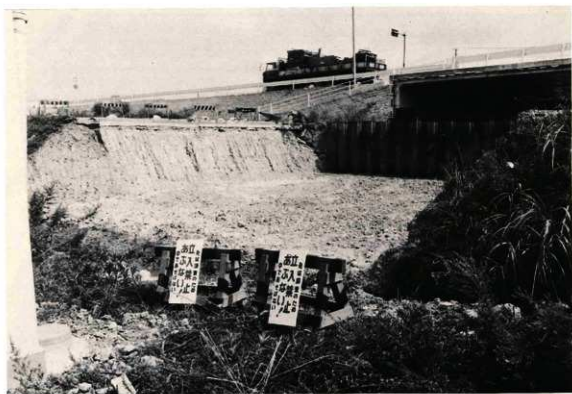


第8圖 版瓦遺跡出土遺物実測図

# 写真図版



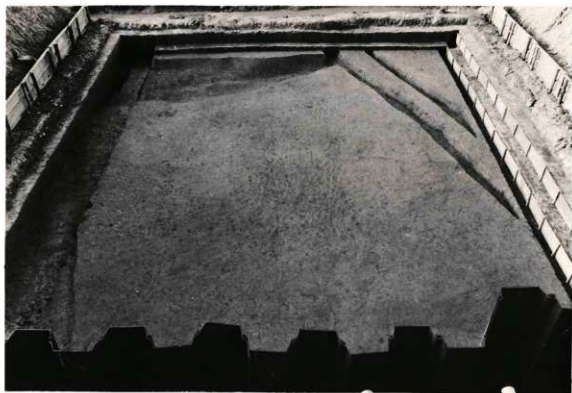
(A) 昭和60年度 第1調査区全景(西より)



(B) 昭和60年度 第1調査区全景(北より)



(A) 第1調査区西側セクション



(B) 第1調査区完掘写真





(A) 第2調査区旧用水路撤去工事



(B) 撤去工事(その2)



(A) 用水路底部撤去



(B) 発掘調査風景



(A) 発掘調査風景



(B) 発掘調査風景



(A) 第2調査区完掘写真(南侧)



(B) 第2調査区完掘写真(北侧)



(A) 第2調査区 SK1



(B) 第2調査区(北より)



〔付 載〕

# 坂 尻 遺 跡

— 第 5 次 調 査 —

## 例 言

1. 本書は、一般国道1号袋井バイパス（袋井地区）建設に伴い袋井市教育委員会が実施した緊急発掘調査の報告書である。
2. 発掘調査は、昭和59年9月3日～10月8日、12月～1日～12月6日に実施した。
3. 現地調査は前田庄一（板尻遺跡調査員）が担当した。
4. 本書に掲載した遺物実測図のうち、土器・土製品・金属器は前田庄一が作成したが、石製品は松井一明氏にお願いした。また、遺物の写真撮影は永井義博氏にお願いした。
5. 本書の執筆・編集は前田庄一が行なった。
6. 本調査に関する事務は袋井市教育委員会社会教育課が行なった。
7. 発掘調査資料はすべて袋井市教育委員会が保管している。

## 凡 例

1. 文章・遺構実測図で使用する略称は次の意味である。  
SB—掘立柱建物 SA—櫓列 SD—溝状遺構 SI—竪穴状遺構  
SX—性格不明の遺構
2. 土器実測図中の番号で右肩に丸印のあるものは土師器を表わす。
3. 土器の底部外面に回転ヘラ削り調整を施すものは、ハで範囲を示した。
4. 土器実測図中のスクリーン・トーン処理は赤彩を示す。

## 目 次

|              |    |
|--------------|----|
| 第1章 序 説      | 1  |
| 第1節 調査にいたる経過 | 1  |
| 第2節 調査の経過    | 1  |
| 第3節 調査体制・方法  | 1  |
| 第2章 遺 構      | 2  |
| 第1節 第 1 地 点  | 2  |
| 第2節 第 2 地 点  | 6  |
| 第3節 第 3 地 点  | 15 |
| 第3章 遺 物      | 16 |
| 第1節 土 器      | 16 |
| 第2節 石 製 品    | 20 |
| 第3節 土 製 品    | 20 |
| 第4節 金 属 器    | 21 |
| 第4章 まとめに代えて  | 21 |



## 挿 図 目 次

|      |                              |    |
|------|------------------------------|----|
| 第1図  | 第1地点・第2地点位置図                 | 2  |
| 第2図  | 平安～鎌倉時代(左)・古墳時代(右)遺構実測図      | 3  |
| 第3図  | SD5内遺物出土状況図                  | 4  |
| 第4図  | SD6内検出遺構実測図                  | 5  |
| 第5図  | SD1実測図                       | 6  |
| 第6図  | 奈良時代遺構実測図(左:上面検出遺構、右:下面検出遺構) | 7  |
| 第7図  | SB1・SB2実測図                   | 8  |
| 第8図  | SA1実測図                       | 9  |
| 第9図  | SI1・2・5～7実測図                 | 10 |
| 第10図 | SI3・SI4実測図                   | 11 |
| 第11図 | SI8実測図                       | 12 |
| 第12図 | 古墳時代遺構実測図                    | 13 |
| 第13図 | SI9実測図                       | 14 |
| 第14図 | 奈良時代(左)・古墳時代(右)遺構実測図         | 15 |
| 第15図 | SI10実測図                      | 15 |
| 第16図 | 出土土器実測図(1)                   | 23 |
| 第17図 | 出土土器実測図(2)                   | 24 |
| 第18図 | 出土土器実測図(3)                   | 25 |
| 第19図 | 出土土器実測図(4)                   | 26 |
| 第20図 | 出土土器実測図(5)                   | 27 |
| 第21図 | 出土土器実測図(6)                   | 28 |
| 第22図 | 出土土器実測図(7)                   | 29 |
| 第23図 | 石製品実測図                       | 29 |
| 第24図 | 土製品実測図(1)                    | 30 |
| 第25図 | 土製品実測図(2)・金属器実測図             | 31 |

## 図 版 目 次

|     |                               |                                          |
|-----|-------------------------------|------------------------------------------|
| 図版1 | (A)SD5内遺物出土状況(北より)            | 図SI8完掘状況(西より)                            |
|     | (B)SX1検出状況(北より)               | (C)SI9内遺物出土状況(南西より、手<br>前からNo88、90、23-1) |
| 図版2 | (A)SD5内土製支脚出土状況(南より)          | 図版5                                      |
|     | (B)SD6全景(東より)                 | (A)SI10内遺物出土状況(西より)                      |
|     | (C)SD6内隠検出状況(南より)             | 図版3地点完掘状況                                |
| 図版3 | (A)第2地点第3面全景(北より)             | 図版6                                      |
|     | (B)第2地点第5面全景(北より)             | 出土遺物                                     |
| 図版4 | (A)SI3・SI4検出状況、検出土状況<br>(南より) | 図版7                                      |
|     |                               | 出土遺物                                     |

# 第1章 序 説

## 第1節 調査にいたる経過

昭和55年から開始された国道1号袋井バイパス建設に関連する埋蔵文化財発掘調査も今回で第5次調査となる。当初は「石ノ形遺跡」と呼ばれた弥生時代の文化財包蔵地は調査が進行するにしたがって従来の遺跡とは別の古墳時代、奈良・平安時代の遺跡となり「坂尻遺跡」と呼称することとなった。昨年までの調査で坂尻遺跡は官衙遺跡として日本全国から注目されるようになったが、遺跡の持つ多種多様な性格から、はたしてここが「佐野郎家」なのかまたは「日根驛家」なのかいまだに特定することができない部分を残している。

## 第2節 調査の経過

今回の調査は、2回に分け3地点について実施した。9月3日から10月8日まで、導水管敷設に伴い2B-c、3C-a区の一部約72㎡を、ボックス本体の建設に伴い2B-i、2C-c、3B-g、3C-a区の一部約8㎡を調査した。この調査で出土した遺物の洗浄、接合等の作業を11月19日から28日まで行なった。12月1日から12月6日まで、導水管敷設に伴い2B-c区の一部約16㎡を調査した。そして、12月7日～12日まで遺物の整理作業を行なった。

## 第3節 調査体制・方法

### i) 調査体制

調査計画 建設省中部地方建設局 浜松工事事務所

調査指導 静岡県教育委員会文化課

調査主体 袋井市教育委員会 教育長 鈴木勲一

調査員 前田庄一

発掘作業員 昭和59年9月3日～10月8日の調査 三浦政平、三浦久雄、石川一、川村義雄、萩田千代子、三浦とく江、山本まさ子、太田清子、鈴木敏子、寺田しま、山崎雪江

昭和59年12月1日～12月6日の調査 萩田千代子、三浦とく江、山本まさ子、太田清子、鈴木敏子、寺田しま、山崎雪江

### ii) 調査方法

第1地点、第2地点の調査には、一般国道1号袋井バイパス建設に伴う発掘調査の際に用いた大グリッド・中グリッド・小グリッドを設定した上で行なわれた。

しかし、第3地点の発掘調査時には、すでに基本杭が失われていたため、磁北から6°33'40"西偏する南北方向の基準ラインを設定し、調査に当たった。

第3地点の調査では、図面作成・遺物取り上げに際しては第3地点で一括して行なった。

## 第2章 遺 構

今回の調査地は、3地点に分かれることは第1章ですでに述べたが、本章では、報告の都合上、9月～10月にかけて調査した2地点のうちの2B—c・3B—a区の部分を第1地点、2B—i・3B—g区の部分を第2地点、12月1日～6日まで実施した地点を第3地点と仮称して報告する。

また、遺構の記述の順序は、新しい時期から古い時期へと選って行なうことになる。

### 第1節 第1地点の遺構

第1地点で検出した遺構は、平安時代後期～鎌倉時代初期の溝状遺構、古墳時代～奈良時代の溝状遺構、古墳時代の溝状遺構等がある。

#### 1) 平安時代後期～鎌倉時代初期の遺構

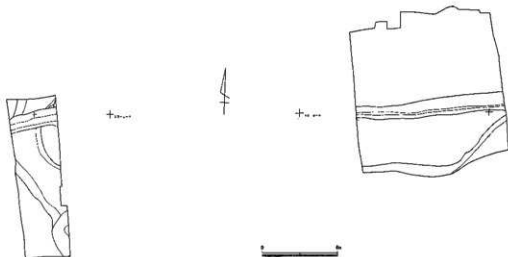
平安時代後期～鎌倉時代初期の遺構は、溝状遺構がある。

##### SD 1

確認面の幅約85cm、深さ約25cmを測る。暗灰色粘土を覆土とする。SD 2を切っていると判断される。このSD 1は、約16m離れた第2地点でも検出しており、東西方向に流れる溝と考えられる。溝底の高さは、第1地点と第2地点では、10cmほど第1地点の方が低くなっている。したがって、東から西に向かって流れる溝と考えられる。壁面は、南に比べ北の方が幅広くになっている。この傾向は、第2地点においても同様である。

##### SD 2

確認面の幅約20cm、深さ約10cmを測る。暗灰色粘土を覆土とする。SD 1・SD 3に切られていると判断される。溝底の深さは一定ではなく、高低があるため、溝が区切れたような状



第1図 第1地点・第2地点位置図

態で検出された。したがって、調査区域の南側まで続くか不明である。

### SD 3

確認面の幅約20cm、深さ約10cmを測る。暗灰色粘土を覆土とする。南北方向に流れる溝であるが、溝底の高さは南と北で変化はなく、流れる方向については不明である。溝の途中に、3ヶ所、長さ約20～30cm、深さ約2～3cmのくぼみがある。

### SD 4

確認面の幅約50～60cm、深さ約15～20cmを測る。灰色粘土を覆土とする。SD 3を切っているように判断される。溝底の高さは、東が西よりわずかに低くなっているが、確認した長さが約2.6mと短いため、流れる方向については不明である。

SD 1～SD 3は、暗灰色粘土を覆土とすることから、平安時代～鎌倉時代に位置づけられる。SD 4は、SD 3を切っていることから、これらの溝のなかでは最も新しいと考えられるが、出土遺物がないため、時期については不明である。

### ii) 奈良時代の遺構

奈良時代の遺構は、柱穴がある。また、遺構としては明確でないが、3B-a-サのポイントから北の2B-c-ツ、3B-c-ト区から土師馬・ミニチュア土器の破片が出土している。この両区の北に位置する第3地点からは、ミニチュア土器・皮袋形土器の破片が出土している。

### iii) 古墳時代～奈良時代の遺構

古墳時代～奈良時代にまたがる遺構に、溝状遺構？とこれに付属する竈群がある。

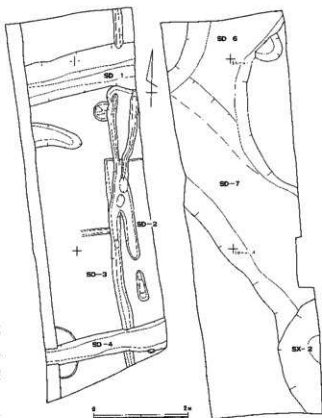
### SD 5

3B-a-サのポイント以南から、古墳時代～奈良時代の土器、竈が比較的多く出土・検出した。

平面では遺構の輪郭をはっきり捉えることができなかった。断面観察、土器・竈の分布から推定した遺構の輪郭を第3図中に破線で示した。

遺構の性格は、溝状遺構、土坑状遺構、竈穴状遺構等が考えられるが、ここでは溝状遺構として報告しておく。

かつて、「坂尻遺跡 県道掛川袋井線道路改築工事に伴う緊急発



第2図 平安～鎌倉時代(左)・古墳時代(右)遺構実測図



第3圖 SD 5内遺物出土状況図

掘調査報告書』で報告したS I 8も、これと同種の遺構と思われる。

土器は、南端と北端から多く出土しており、中央部分からの出土は少ない。南端の東寄りのところからは土製支脚と思われる火を受けた粘土塊が集中して出土した。南端西寄りの底面直上からは、長径20~30cmを測る礫が数個検出された。

#### S X 1

S D 5の南側で検出した礫群である。礫は、重なりが少なく、比較的平坦であった。また、S X 1内の土器は、礫の上からも、礫の下からも出土しており、礫と混在していたと言える。

遺構の性格は、S D 5の護岸としての施設と考えられる。

#### iv) 古墳時代の遺構

古墳時代の遺構は、溝状遺構がある。

#### S D 6

確認面の幅約1.5m、深さ約30cmを測る。S D 7に流入する溝と思われる、『板尻遺跡—古墳時代編—』に記載されているK S D 28の一部である。

覆土の暗灰色粘土中に約50個の礫が存在したが、溝が緩くカーブするにもかかわらず、礫は一直線状を呈する。

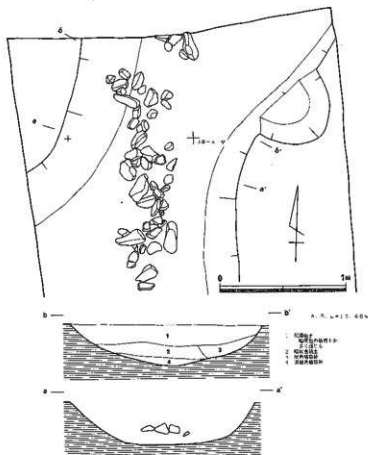
#### S D 7

確認面の幅約1.8m、深さ約40cmを測る。北西から南東に流れる溝で、3 B-d区あたりで、第2地点で検出したS D 14と合流するものと思われる。

溝底の高さは、約20cm S D 6、S D 14より低くなる。

覆土は上から、暗灰色土(厚さ約30cm)、暗灰色粘土(厚さ約10cm)となる。西壁の発掘限界、底面上で積み重なった礫を検出した。

また、溝の南端で、S D 7に付属すると思われる、径約2.4m、深さ約70cmを測る半円形の落ち込みを検出した。



第4図 S D 6内検出礫実測図

## 第2節 第2地点の遺構

第2地点の調査では、平安時代後期～鎌倉時代初期の溝状遺構、奈良時代の掘立柱建物、柵列、溝状遺構、竪穴状遺構、古墳時代の竪穴住居、溝状遺構、竪穴状遺構を検出した。

### i) 平安時代後期～鎌倉時代初期の遺構

この時期の遺構に、溝状遺構SD1がある。他に遺構は検出されなかった。

昭和55年度～57年度の調査で、3B-bより掘立柱建物、柵列、3B-e区より井戸状遺構、3C-b・d・e区にかけて柵列が検出されている。当時、これらの地区が生活の場であったことが窺われる。今回の調査地は、これらの地区とはいくらか離れているものの、検出された遺構が溝状遺構のみと、遺構の存在はきわめて稀薄である。したがって、今回の調査地は、居住空間でなかったことが推定されるのであり、逆に居住空間を今回の調査地より南に限定できる要素になるものと思われる。

### SD1

第1地点で検出されたSD1の延長部分である。

溝幅は、発掘区域の西端で約60cmを測る。3B-gーカのポイントから約1m東あたりから幅を増し、発掘区域の東端で約1mを測る。溝底は、わずかではあるが、東から西に傾斜している。

### ii) 奈良時代の遺構

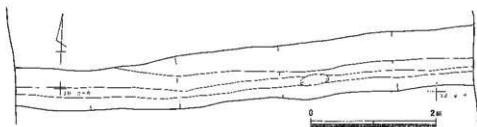
奈良時代の遺構実測図を、上面検出遺構と下面検出遺構に分けて第5図として掲載した。

第2地点は、5回掘り下げ、5面で遺構確認を行なった。まず、第1面で近現代の溝状遺構と平安時代後期～鎌倉時代初期の溝状遺構を検出した。以後、約15cm、約10cm、約10cm、約20cm掘り下げを行なった。

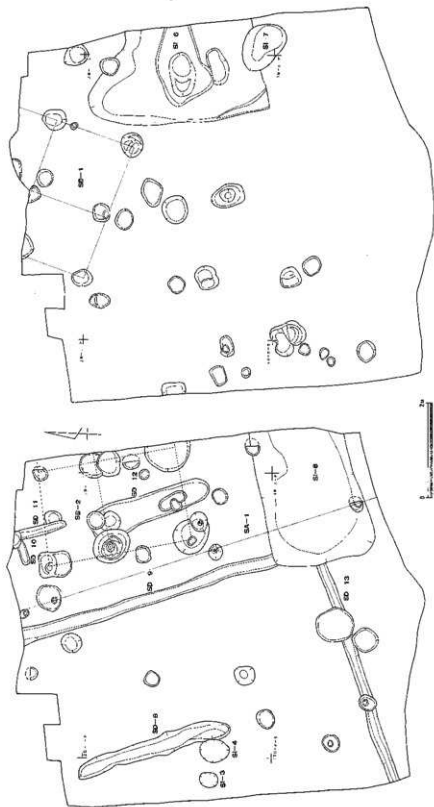
奈良時代の遺構は、第2面目～第5面目にかけて検出した。また、古墳時代の遺構は、第4面目、第5面目で検出した。したがって、第4面目、第5面目からは奈良時代の遺構と古墳時代の遺構を同時に検出したわけである。

第5図で上面検出遺構としたのは2面目、3面目で検出した遺構、下面検出遺構としたものは4面目、5面目で検出した遺構である。

第5面目で検出された奈良時代の遺構は、上の面で検出しえなかった遺構である。また、第4面目で検出された遺構のなかにも、上面で検出しえなかった遺構が存在するものと思われる。



第5図 SD1実測図



第6図 奈良時代遺構実測図（左：上面検山遺構、右：下面検出遺構）



この2点を差し引いて考えなくてはならないが、次の点を指摘できるものと思う。

つまり、奈良時代の古い時期の柱穴は、調査区域の西半に、新しい時期の柱穴は東半に集中するという傾向である。

# 掘立柱建物

## SB 1

調査区域の北端、2 B-1ース・ツ・テ・ヌ区で東西2間分、南北1間分の掘立柱建物跡を検出した。

建物跡が調査区域外に続くため、間数等は不明である。

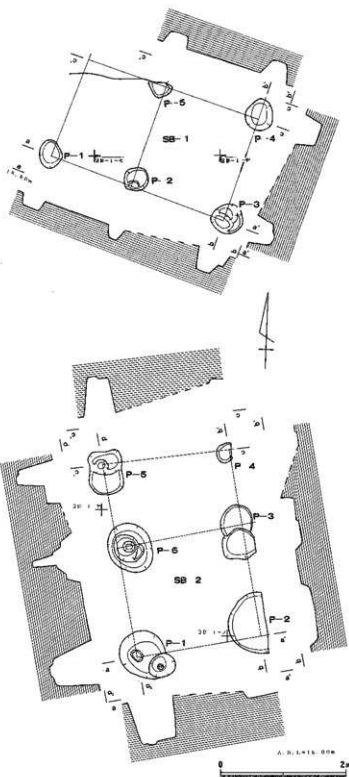
柱間は、東西が西から約1.4m、約1.6m、南北がP-3・P-4間で約1.7mを測る。柱穴の径は、P-1・P-2が約40cm、P-3・P-4が約50cmを測る。柱穴の深さは、P-4が他の柱穴より約10cm深くなる。

## SB 2

調査区域の東端、2 B-1ース・ネ・ノ区で東西1間分、南北2間分の掘立柱建物跡を検出した。

建物跡が調査区域外に続くため、間数等は不明である。

柱間は、東西がP-1・



第7図 SB 1・SB 2実測図

P-2間で約2m、南北はP-5・P-6間で約1.3m、P-6・P-1間で約1.8mを測る。したがって、P-6・P-1間に比べ、P-5・P-6間が狭くなっている。これは、P-2～P-4の間でも同じである。柱穴の径は、P-4が小さく約30cm、P-3が約50cm、P-1・P-5・P-6は約70～80cm、P-2は約1mを測る。柱穴の深さは、西3本が深く、東3本が浅くなっている。P-2・P-3が最も浅く、P-1・P-5・P-6より約50cm浅くなる。

P-2から第21図No.97の須恵器が出土している。

柵列

#### SA1

調査区域の中央東寄りの2B-1-17、3B-g-ナ・ニ区で2間分を検出した。主軸方位は、N-20°30'-Wを測る。SD9の東約40cmの位置で、SD9と平行に走る。

柱穴の径は、P-1・P-2が約30cm、P-3が約50cmを測る。柱穴の深さは、P-3がP-1・P-2より約30cm浅くなる。柱間は、南から約3.2m、約3.6mを測る。P-2には柱根が遺存していた。

溝状遺構

#### SD8

調査区域の西端に近い2B-1-17ケ、セ・ソ区で検出された。幅約40cm、深さ約10cm、長さ約3.4mを測る。主軸方位は、N-20°30'-Wを測る。SD9の西約2.7mの位置で平行に走る。

南端の一部をSI4により破壊される。

#### SD9

調査区域の中央2B-1-17・テ・ト、ノ区で検出された。幅約30cm、深さ約4cmを測る。主軸方位は、N-20°-Wを測る。

溝の南端は、SI8に切られるが、SI8より南では検出されていないため、SI8の位置で完結していたか、SD13に接続していたものと思われる。

#### SD10

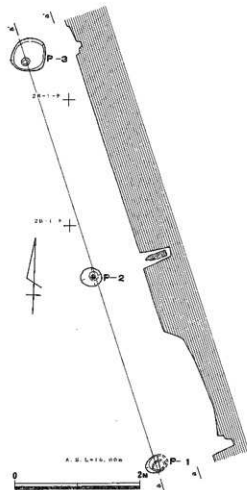
調査区域の北端2B-1-ヌ区で検出された。幅約20cm、深さ約5cmを測る。

#### SD11

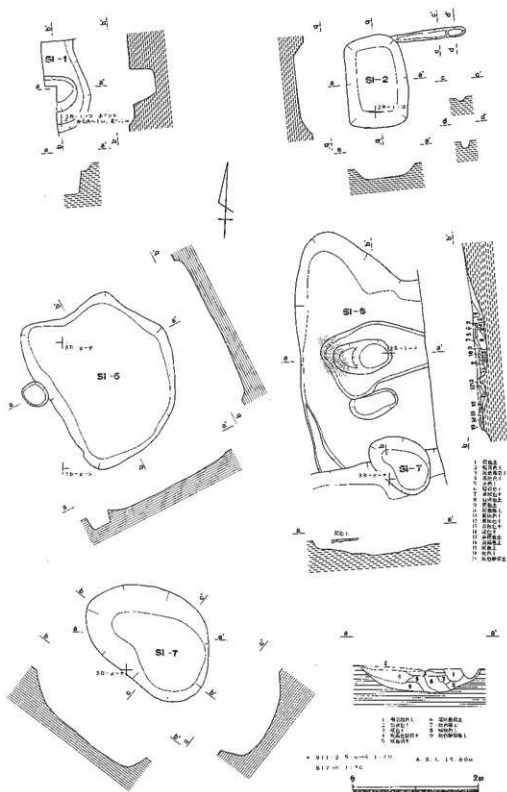
調査区域の北端2B-1-ヌ区で検出された。幅約20cm、深さ約3cmを測る。

#### SD12

調査区域の東端2B-1-ネ・ノ区で検出さ



第8図 SA1実測図



第9圖 SI 1.2.5~7實測圖

れた。確認面の幅約60cm、深さ約7cm、長さ約2.7mを測る。主軸方位は、N—22°30′—Wを測る。SD9の東約1.4mの位置で、SD9と平行に走る。

#### SD13

調査区域の南端3B—g—キ、サ・シ、タ、ナで検出された。確認面の幅約20cm、深さ約20cmを測る。長さは約4.8m分を確認した。主軸方位は、N—68°—Eを測る。

溝は、3B—g—ナでSI8に切られている。

SD13とSD9の角度は88°と直角に近く、この2本の溝は関連があると考えた。そのため、SD13は、第4面で検出されたにもかかわらず、上面検出遺構に含めた。しかし、溝底の高さは、SD13の方がSD9より約30cm低くなることからすれば、この両溝間には時期差が存在する可能性がある。時期差があるとすれば、SD9より下の面から検出されたSD13の方を古く考えたい。

#### 竪穴状遺構

#### SI3

調査区域の西端2B—i—コ区で検出された。掘方平面形は、東西約30cm、南北約40cmの楕円形を呈し、深さは約2cmを測る。底面上に約0.3cmの厚さで灰が堆積していた。

第21図No.101の土器は、SI3の上にかぶさるような状態で出土した。

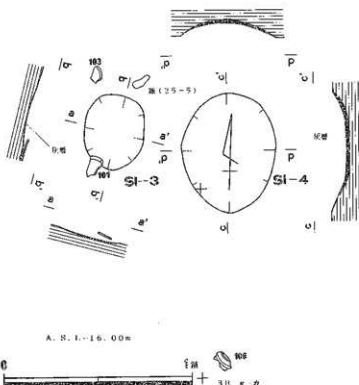
#### SI4

SI3の東約20cmの2B—i—ソ区で検出された。掘方平面形は、東西約50cm、南北約65cmの楕円形を呈し、深さは約10cmを測る。底面上に約2cmの厚さで灰が堆積していた。

#### SI6

調査区域の東端、2B—i—ネ・ノ、2C—c—エ・オ区で検出された。

表上の最上層中に、東西約40cm、南北約70cmの範囲で、多量の焼土と少量の炭を含む灰色土を検出。



第10図 SI3・SI4 実測図

# S 17

調査区域の東端、2B-i-i-ノ、2C-c-o、3C-a-a区で検出された。掘方平面形は、長径約1.1m、短径約75cmの楕円形を呈し、深さは約20cmを測る。

# S 18

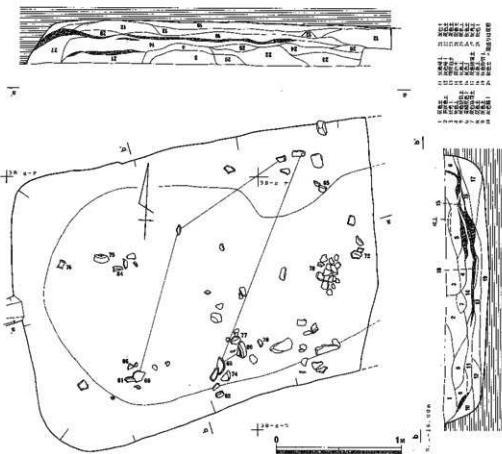
調査区域の南東隅、2B-i-i-ノ、3B-g-ナ、2C-c-o、3C-a-a区で検出された。遺構は調査区域外にまで及ぶ。東西約2.9m、南北約2.05m、深さ約35cmを測る。

覆土中に、灰・炭がかたまっているところが13ヶ所（灰12ヶ所、炭1ヶ所）存在した。この灰・炭のかたまりは、大きく上下の2面に分けることができる。

上面で検出された灰・炭（灰10ヶ所、炭1ヶ所）は、径30～70cmの楕円形（厚さ0.2～3cm）を呈し、かたまりの規模は小さい。また、これらのかたまりのうち、遺構の北端中央に3つ、北端の東端に2つ、南端の東端に2つ重なっていた。かたまりの分布は、遺構の北半分に8ヶ所が集中し、南半分には3ヶ所しか存在しない。

これは、土器の出土が、南半分に集中しているのと対照的な状態である。

下面で検出された灰は、ほとんど遺構全体に広がっており、東西約2m、南北約1.3mを測る。



第11図 S 18実測図

### iii) 古墳時代の遺構

この時期の遺構は、竪穴住居、溝状遺構、竪穴状遺構がある。

#### 竪穴住居

##### S I 9

2 B—i—ケ・コ、セ・ソ、チ・ト区で検出された。

東西約3.8m、南北約3.5mを測る。南端の一部はS I 5によりこわされている。北壁の中央やや東寄りに竈が作りつけられている。壁溝は存在しないと思われる。柱穴と思われるものを3つ検出した。P—1は径約15cm、深さ約30cm、P—2は径約10cm、深さ約15cm、P—3は径約30cm、深さ約20cmを測る。

床面上で須恵器・土師器・鉄鎌・砥石が出土した。遺物は、南東の一角を除く全城に散布するが、西半分に集中する傾向にある。

竈は、壁面から30cmほど張り出して構築されている。竈は、床面と同じ高さから構築されている。壁面から外に張り出す部分（2層以北）と住居址内（3層以南）では約6cmの高低差をもつ。9層は、皿状に焼土化した部分であり、燃焼部に相当すると思われ、9層の南の10層（黒色灰・炭屑）が焚口部に相当するものと思われる。

#### 溝状遺構

##### SD 14

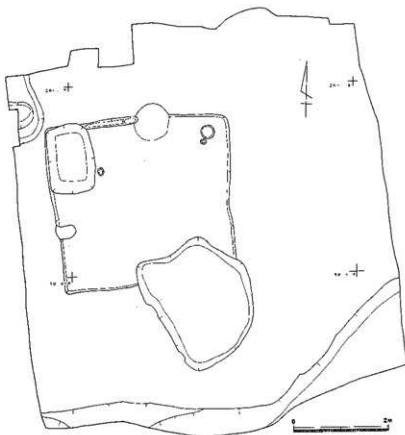
3 B—g—ナ・ニ、3 C—a—ア・イ区にかけて検出された。

遺構の大部分は調査区域外にある。

確認面からの深さ約30cmを測る。

北東方向から南西方向に流れるものと思われ、SD 7と接続する可能性をもっている。

このSD 14は、『板尻遺跡—古墳時代編—』に記載されているKSD 25と同一の溝である。



第12図 古墳時代遺構実測図

# 竪穴状遺構

## S 1 1

2 B-1-ク・ケ区で遺構の一部を検出した。遺構の大半は、調査区域外に存在する。

遺構は2段に掘り込まれており、深さは約45cmを測る。

## S 1 2

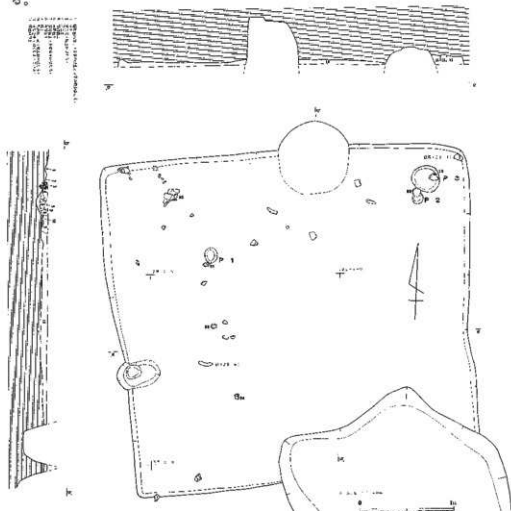
2 B-1-ケ・コ、セ・ソ区で検出された。

長径約1.5m、短径約1m、確認面からの深さ約20cmを測る。北東隅には、長さ約1.2m、幅約15cm、深さ約5cmを測る溝状遺構が接続している。

S 1 2の位置が、S 1 9の北西隅に当たることから、S 1 2はS 1 9の貯蔵穴の可能性もあるが、S 1 2の上面から第20図No.93の甕が出土していることから、可能性は薄いと考える。

## S 1 5

長径約2.4m、短径約2.1m、深さ約15cmを測る。覆土は、焼土・灰が混じる黄褐色土である。



第13図 S 1 9実測図

### 第3節 第3地点の遺構

第3地点の調査では、奈良時代の  
柱穴、竪穴状遺構、古墳時代の溝状  
遺構を検出した。

#### i) 奈良時代の遺構

##### 竪穴状遺構

##### S110

東西約1.4m、南北約2.8mを検出  
した。北と東は調査区域外  
に続いている。底面は平坦  
ではなく、南に向かって傾  
斜しており、最も深い所で  
約50cmを測る。

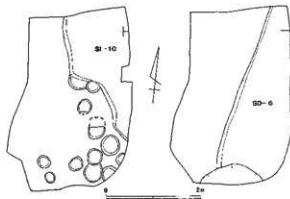
覆土中より土器、土製支  
脚片、炭化木片、鉄斧と思  
われる鉄片が出土している。  
土製支脚は、遺構の中央区  
寄りの部分と北端の部分の  
2ヶ所からほとんど同じレ  
ベルで出土している。

覆土中に炭・灰が多量に  
混じるのが特徴である。東  
側の土層断面でみると、1  
層・14層・17層・7層・22  
層・24層・25層に炭・灰が  
多く混じっている。

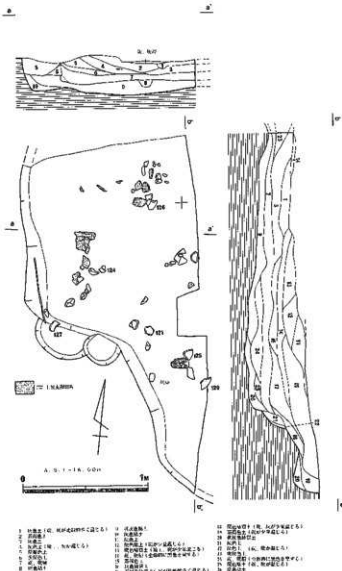
#### ii) 古墳時代の遺構

##### SD6

第1地点で検出したSD  
6の続きであるが、第1地  
点でSD6内より検出され  
た際は第3地点では検出さ  
れなかった。したがって、  
礫は第1地点と第3地点の  
間で途切れる。



第14図 奈良時代(左)・古墳時代(右)遺構実測図



第15図 S110実測図



### 第3章 遺 物

ここでは、土器、石製品、土製品、金属器の順に概述する。

#### 第1節 土 器

土器については各道槽別に概述する。

##### 第1地点

##### 近現代溝出土土器（1・2）

第2章の遺構では触れなかったが、3 B-aーシ・ス、チ・ツ区で幅約1.4m、深さ約20cmを測る近現代溝を検出しており、1・2の片礎はそこから出土したものである。

1は、口径16.9cmを測り、体部から口縁部の外面に蓮弁を型押しする。2は、碗の底部で、全面を施軸する。

##### SD5出土土器（3～40）

SD5からは、古墳時代～奈良時代の須恵器・土師器が出土している。

3～7は古墳時代に、8～23は奈良時代に属する環である。3は、稜の下に沈線を巡らせることにより稜を際立たせる。7は、外面全体に自然軸が付着している。かえりは形態化したものであるが、口縁端部より下にのびている。8は、口径16.2cmを測り、口縁部を内傾させ、口縁端部を外反させる。9は、口径15.2cmを測り、口縁部全体を外反させる。10～16は、有台坏身と確認できるものである。このうち12・13は、SD5の覆土最上面で検出した窪地状の落ち込みから出土した有台坏身で、時期的に新しくなる可能性をもつ。10は、口径14.6cm、器高4.35cm、11は、口径13.8cm、器高3.9cmを測る有台坏身で、全形を知りうるものである。10・11とも底部外面から腰部まで回転ヘラ削り調整を施す。10は、全体に器壁を厚く作る。体部から口縁部の外面に平行のノタ目が付き、内面に螺旋状のノタ目が付く。12は、腰部が張るという特徴をもつ。16は、口径9.0cm、器高4.2cmを測る小形の坏で、底部外面に回転ヘラ削り調整を施す。17は、口径14.1cm、器高4.8cmを測る無台坏身で、底部外面に回転ヘラ削り調整を施す。体部から口縁部の外面、底部内面には螺旋状のノタ目が付くが、体部・口縁部の内面には平行のノタ目が付く。18～20は、口縁端部を比較的薄く作り、体部と口縁部の境あたりを肥厚させる。18と21の底部外面には回転ヘラ削り調整が施される。18～20は小破片で、調整ははっきりしないが、21は体部・口縁部の内外面に平行のノタ目が、底部の内外面に螺旋状のノタ目が残る。22・23は坏身で、口径19.2cm、18.2cmを測る。23の底部外面には回転ヘラ削り調整が施される。24は、口径18.1cm、最大径18.6cm、器高は現存7.35cmを測る。口縁部の内外面に幅広いナデ調整を施す。口縁部外面の下端に狭い沈線状のナデで施されるため、幅広いナデとの境に稜（段差）が付く。内面の口縁部、口縁部と体部の境に平行のノタ目が付く。内面の底部から体部にかけて螺旋状のノタ目が残る。体部外面の下半に回転ヘラ削り調整を施す。25・26は短頸甕である。25の外面には自然軸がかかる。27は甕の口頸部と思われる。

28の機瓶は口径14.6cm、現存幅42.0cmを測る。体部側面の蓋をした箇所ではちょうどはずれている。肩部に円形貼付文がつけられている。体部外面は、中央部分をのぞき、全面に平行の叩き目がつけられている。中央部分の叩き目はナデによりほとんど消えている。内面の蓋に近い部分には縦方向のノタ目がつくが、他の部分には同心円の文様がつく。

29～40は土師器である。29・30の坏は、器表が剥落しており、内外面の調整は不明である。31の坏の内面は、ナデ調整の後赤彩を施す。口唇部を斜めに整形する。32は、口径14cm、器高現存3.0cmを測る。口唇部の中央を沈線状にくぼませて作る。内外面に赤彩を施す。33は口径13.2cmを測る小形の甕で、体部外面に粗い縦の刷毛目調整が施される。34には縦の、35・36には斜めの粗い刷毛目調整が施される。37の口縁部外面には粘土の跡がみられ、この部分に指頭圧痕が付く。頸部外面には斜めの細かい刷毛目調整が施される。頸部内面にはわずかに横の細かい刷毛目が残存する。38の頸部外面にはナデ痕が付着する。体部外面には、斜めの細かい刷毛目調整が施される。39の頸部外面にはナデ痕が付き、体部外面には斜めの細かい刷毛目調整が施される。口縁部の内面にはナデ痕が付き、体部内面には横の粗い刷毛目調整が施される。

#### S X 1 出土土器 (41～44)

41は、口径9.5cm、最大径11.6cm、器高3.8cmを測る。底部外面と体部の下端を回転ヘラ削り調整する。42は平瓶の口頸部である。

43は台付甕の脚部ではないかと思われる。器表が剥落しているため調整は不明である。器壁は厚く、かなり重量感がある。44は口径33.3cmを測る。頸部外面に斜めの比較的細かい刷毛目調整が施される。

#### S D 6 出土土器 (45、47～49)

45は、口径10.4cm、器高2.85cmを測る。天井部外面の中央はくぼむものと思われる。稜の下にナデが施され、稜を際立たせる。

47の坏の口縁部外面にはナデ痕が付着する。

#### S D 7 出土土器 (46、50)

46の体部・底部の外面には指頭圧痕が多く見られる。50の壺は、最大径14.25cm、器高は現存8.75cmを測る。

#### 包含層出土土器 (51～59)

51は口径15.5cmを測る。口縁端部の作りに鋭さはみられない。54は直径4.6cmを測る人形のつまみである。55の蓋は、かなり扁平なものと考えられる。56の有台坏身は、底部外面を回転ヘラ削り調整する。57の無台坏身は、底部中央がくぼむ。底部外面に回転ヘラ削り調整が施されるが、この回転ヘラ削り調整は底部の端部まで及ばない。外面の体部上半から口縁部、底部の内面に螺旋状のノタ目がみられる。

59の土師器つまみは、外面に赤彩を施す。

#### 第2地点

##### S D 1 出土土器 (60・61)

60は瓶の口頸部で、口縁端部以外の外面に灰色の釉が塗られている。

SI 4 出土土器 (62)

62は、口径13.2cm、器高3.45cmを測る無台坏身で、底部外面に回転へう削り調整を施すが、これは底部の端部まで及ばない。

SI 6 出土土器 (63)

63は、口径18.4cmを測る土師器甕の口頸部で、頸部外面に縦の刷毛目調整がみられる。

SI 7 出土土器 (64)

64の土師器高坏の脚部は、全体に磨減が著しく、丸味を帯びている。

SI 8 出土土器 (65~86)

65~69の坏蓋のうち65~68は、口縁部を内側にまげるものである。69は、口縁部が外反するものである。これらの坏蓋の口径は、65から順に15.3cm、13.7cm、16.6cm、14.9cm、16.4cmを測る。器形にゆがみがみられる66が他の坏蓋よりひとまわり小さくなる。70の有台坏身は、底部が高台の端部より下に突出する。71~74の無台坏身は、回転へう削り調整の範囲、口唇部に見られる手法から、71・72と73・74に分けられる。71・72は、底部外面の回転へう削り調整は底部の端部にまで及んでいない。口唇部は、斜めに作られている。これに対し、73・74の回転へう削り調整は底部全体に及び、口唇部には明瞭な段差がつけられている。このほかの観点では、71の底部・体部の内面は螺旋状のノタ目と判断されるが、他は平行のノタ目と思われる。71・72・73の底部内面と体部内面の境は明瞭な屈曲となっているが、74は明瞭な屈曲となっていない、等が指摘できる。74の底部外面には、へう記号と墨書「目」が存在する。75の無台坏身の底部外面には糸切り痕と羽散痕がみられる。体部・口縁部の外面はノタ目が顕著である。76は高盤の脚と思われる。

77の土師器坏の体部・口縁部の外面には、ナデ痕が明瞭に付く。78の土師器皿の外面にはナデ痕が明瞭に見られ、内面には赤彩が施される。79~86は土師器甕である。79~82の口縁部・頸部の外面、81・82の口縁部・頸部の内面にはナデ痕が明瞭に付く。85・86は、口縁部が直立する。また、口縁部はわずかに肥厚させて作られている。85の頸部外面、86の口縁部外面にはナデ痕が明瞭に付く。

SI 14 出土土器 (87)

87は、土師器高坏の脚部で、内面には粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に見られる。

SI 9 出土土器 (88~96)

SI 9の床面から出土した土器(88~94)とサブトレンチ内から出土した土器(95・96)を同示した。

88の須恵器坏蓋は、口径10.4cm、器高3.7cmを測る。天井部の中央は少しくぼむため、回転へう削り調整が及ばない。口唇部を丸く収める。89の坏身は、口径8.9cm、最大径10.9cm、器高3.6cmを測る。底部から体部にかけて丸味を帯びる。焼成は生焼けに近い。90は、口径9.2cm、最大径10.6cm、器高3.3cmを測る。89・90の体部外面には平行のノタ目、内面の底部から体部にかけては螺旋状のノタ目が見られる。91の甕の口頸部は、口縁端部が水平に開く。

口縁部に「具」による沈線状の稜を付す。93は土師器甕で、体部の最大径16.0cmを測る。頸部から体部外面には比較的細かい縦の刷毛目調整が施される。体部の内面、頸部寄りの部分は斜めの刷毛目調整、それ以外の部分には横の粗い刷毛目調整が施される。94は、底部径13.4cmを測る台付甕の脚台部分で、端部を肥厚させる。器表はほとんど剥落しているが、内面に横の刷毛目調整が部分的に残る。95の坏蓋は、口径10.7cm、器高3.5cmを測る。稜は沈線によって表現される。回転ヘラ削り調整は天井部のみに施され、体部には及ばない。そのため、天井部と体部の境は器壁が厚くなる。

#### 柱穴出土土器（97・98）

97は須恵器甕で、口径16.2cmを測る。98は土師器脚付皿の脚部で、脚の内外面を赤彩する。包含層出土土器（99～118）

99～105は須恵器坏蓋である。99・100は、口縁部を強く屈曲させ、口縁端部を外反させる。101～103は口縁部を内側に折りまげるものである。104は口縁部が下を向き、105は、口縁部が下を向き、口縁端部を外反させる。99・104・105は口径14cm前後と小振りである。106は、口径14.0cm、器高4.2cmを測る。底部外面から腰部まで回転ヘラ削り調整を施す。口唇部は丸味を帯びる。106～110の無台坏身のうち、108・109は口唇部を斜めに作るだけであるが、110は明瞭な段をつける。底部外面の回転ヘラ削り調整は、109・110では底部の端部まで及ぶが、108は底部の端部まで及ばない。108・109の内外面は螺旋状ノタ目が見られ、110の内外面は平行のノタ目である。111は口径13.9cm、器高3.6cmを測る。底部外面を回転ヘラ削り調整する。112は、口径13.3cmを測る。口唇部の外面を丸く収める。内外面とも螺旋状のノタ目と思われる。113は口径18.2cm、器高2.5cmを測る皿で、底部外面を回転ヘラ削り調整する。底部外面に「日根大」の墨書がある。115は、口径13.0cm、体部最大径12.6cm、器高15.7cmを測る大型甕である。外面の体部下半から底部にかけては、粗い刷毛目調整後削り調整を施す。体部の内面は、上半に指頭圧痕が残り、下半はヘラナデ調整を施す。116・117は山茶碗の底部である。116は底部外面に糸切り痕を残し、117の底部外面の糸切り痕は、ナデ消される。118は小皿で、口径8.8cm、器高1.85cmを測る。底部を厚く作る。

#### 第3地点

##### S T10出土土器（119～128）

119は坏蓋で、口径15.6cmを測る。口縁部の器壁を薄く作る。120は、口径14.2cm、器高4.5cmを測る有台坏身で、底部外面から腰部まで回転ヘラ削り調整を施す。121の無台坏身は、口径14.6cm、器高3.8cmを測る。底部外面に回転ヘラ削り調整を施す。124は甲斐型坏で口径12.5cm、器高現存4.7cmを測る。外面の調整は器表の剥落により不明であるが、体部の内面は斜めのヘラ磨きで、口縁部の内面は、ヘラ磨き後ナデ調整を施す。内外面に赤彩を施す。128は、口径11.2cmを測る土師器甕で、口唇部を丸く収める。

#### 柱穴・包含層出土土器（129～130）

129は、口径7.9cm、最大径9.6cm、器高現存2.6cmを測る。立ちあがりは低く内傾する。130の土師器甕は頸部が直立し、口縁部は外反する。

## 第2節 石 製 品

1はS I 9から出土した凝灰岩製の砥石で、現存縦9.1cm、横7.7cmを測る。2面の使用痕が観察されるが、他は欠損している。側面には多方向の擦痕や細かな溝状の擦痕が観察される。砥石全体が煤けている。2はS D 5から出土した砂岩製の小形の手持ち用の砥石と考えられ、縦5.4cm、横2.8cm、厚さ1.8cmを測る。ほぼ完形品である。使用面は4面あり、4面とも多数の多方向からの擦痕とやや粗い溝状の擦痕が観察される。3はS D 5から出土した頁岩製のスクレイパーである。上端には押圧剥離、下端には細かな剥離痕が見られる。

## 第3節 土 製 品

土製品には、ミニチュア土器、土馬、その他祭祀に関係すると思われる土製品、土製支脚等がある。

### i) ミニチュア土器 (1～6)

ミニチュア土器は、主に第1地点と第3地点から出土している。第1地点では、3 B—a—サのポイント附近より北から出土し、第3地点では、南半分から集中して出土している。したがって、出土地点は、狭い地点に集中すると言えるが、遺構は明確ではない。

図示した6点のミニチュア土器のうち、3・5が第1地点、1・2・6が第3地点、4が第2地点からの出土である。

1は皮袋形土器で、現存幅4.85cm、現存高2.65cmを測る。内面をナデ調整する。2は、最大径4.6cm、器高は現存3.1cmを測る。内外面とも指で押圧を加え整形している。3は、最大径2.6cm、器高は現存2.2cmを測る。器表が剥落しているため、調整は不明である。内面は、指で押圧を加えただけと思われる。体部・底部の器壁は厚い。4は、最大径4.6cm、器高は現存3.85cmを測る。5・6は甕を模したものとわれ、把手を表わすと考えられる粘土が貼付されている。

### ii) 土馬 (7～14)

土馬は、第1地点の3 B—a—サのポイント附近より北から出土している。

胴体と足が出土しているが、顔面と思われるものは出土していない。

まず、足であるが、足の表現の仕方には3通りある。①足は胴体から捻り出されるが、左右を別々に作り出すのではなく、2本まとめて作り出される—8、②足は胴体から捻り出され、左右別々に作り出される。正面から見た場合、足としての高さはあまりない—9・10・11、③足は胴体から捻り出され、左右別々に作り出される。足は大形で、高さも比較的高い—12・13・14、である。胴体の断面形は、三角形を呈する—8、三角形に近い—7、楕円形を呈する—9に分けられる。

なお、9には現在、尻尾がないが、尻尾がとれた痕跡も確認できない。このことからすれば、9は馬でない可能性がある。

### iii) その他の祭祀用土製品 (15～19)

性格不明の土製品は、15～19である。これらは、土馬・ミニチュア土器と同じ地点から出土していることから、祭祀に関係するものと思われる。

15は、欠損部分が多く形状もはっきりしないが、偏平な粘土の上に、断面円形を呈する瓦尾のようなものを貼付している。16は、断面楕円形を呈するものに、長さ1.6cm、幅9mmの粘土を貼付したものである。17は、全長3.5cmを測り、断面は円形を呈する。一端は二股に分かれ、全形はY字状を呈する。二股に分かれる部分に押圧を加えた痕跡があることと、側面のカーブが違うことを考え合わせると、二股に分かれる方を基部にして貼り付け、二股の部分を外から粘土で補強するものと考えられる。18・19は、17と若干形状は異なるが、用途は同じであろうと考えられる。

#### iv) 土製支脚 (20)

SD 5 から出土した。現存長14.0cm、現存幅7.6cm、現存厚さ7.6cmを測る。形状は、四角錐状を呈するものと思われる。色調は赤褐色を呈する。

#### v) 不明土製品 (21)

SI 8 から出土した。全長6.8cmを測る。三角柱状を呈する。粘土を焼いたものである。

### 第4節 金 属 器

金属器は、鉄鎌、刀子、銀環、不明鉄製品がある。

1は、全長4.6cm、幅1.5cm、厚さ5mmを測る不明鉄製品である。2は、本来U字形状を呈するものと思われるが、現在は欠損によりL字状を呈する。断面形は屈曲する部分を境に、円形と長方形に分かれる。1・2は、SD 5 の最上面の窪地状の落ち込みから出土した。3は、SD 5 から出土した銀環で、径1.8cmを測る。断面形は三角形を呈する。銀箔は内側部分にのみ遺存していた。4は、SD 5 から出土した刀子片で、現存長4.0cm、最大幅8.5mmを測る。5は、2B-i-ii区から出土した鎌で、現存長10.7cm、最大幅3.1cmを測る。先端部を欠損する。基部の折り返しについては、錆化して腐れているため不明である。周囲の同じ高さから出土した土器から、時期は奈良時代後半と考えられる。6は、SI 9 の床面から出土した鎌で、現存長13.5cm、最大幅2.9cmを測る。先端部を欠損する。基部に折り返しがみられる。

## 第4章 まとめにかえて

今回調査した面積は、第1地点、第2地点、第3地点の3地点を合わせても100㎡足らずと、坂尻遺跡全体のほんの一部にすぎない。にもかかわらず、検出・出土した遺構・遺物は、坂尻遺跡を考える上で大きな意義をもつものと考ええる。

そこで、今回検出した遺構・遺物を概括することにより、まとめにかえたい。

まず、古墳時代の遺構で主要なものは、SD 6、SD 7、SD 14、SI 9がある。

SD 6、SD 14については、今回調査するに当たり、その存在は予め予測できた。というのは、坂尻遺跡の第1次～第4次の調査で、これらにつながる部分を検出していたからである。

これに対し、SD7は全く予期しなかった新山の溝状遺構である。したがって、このSD7は、未調査地でいずれかの溝状遺構につながるのではないかと考える。この可能性が最も高いのが第2地点で検出したSD14である。

竪穴住居跡SI9も予期しない遺構であった。この時期の竪穴住居跡は、今回の調査地から南に約100m離れた地点で、昭和59年度の緊急発掘調査に伴い検出されている。しかし、坂尻遺跡の第1次～第4次調査では、この時期の竪穴住居跡は検出されていない。したがって、今回のSI9の検出は、古墳時代後期の坂尻遺跡内の集落の内容、特に竪穴住居跡の分布という点について興味を抱かせる。

奈良時代の遺構・遺物で注目すべきものは、竪穴状遺構SI3、SI4、SI8、SI10、祭祀遺物がある。

竪穴状遺構SI10は奈良時代の前半に、SI3・SI4・SI8は奈良時代の後半に位置づけられる。SI3・SI4は、規模、底面上に灰が堆積するという共通点から、遺構の性格は同じものと言える。このSI3・SI4は火を焚いた場所と思われる。

さて、SI10とSI8であるが、ともに遺構全体を掘ったわけではないが、SI10は東西約1.4m、南北約2.8m、SI8は東西約2.9m、南北約2.05mを測る大形の竪穴状遺構である。SI10・SI8、ともに覆土中に灰を含むが、両者は灰の含みかたが異なる。つまり、SI10の場合は、土に灰・炭が凝じのに対し、SI8では、灰が層を成していることである。この相違を次のように解釈したい。SI10は、穴を掘って、灰・炭混じりの土を捨てたところであり、SI8は、穴を掘り、火を焚いたところである。

このSI10・SI8の性格は、ごみ捨て場としての性格を帯びていたものと思われる。

SI10・SI8の性格はひとまず置くとしても、奈良時代の前半と後半のある時期、ある期間に2つの大きな穴があいていたことは間違いない事実である。

坂尻遺跡は郡衙跡と推定されるが、このような大きな穴があく場所はどういう位置を占めていたのだろうか。おそらく、人目につかない場所であったのではないかと。そして、このような大きなごみ捨て場を必要とした施設が近くに存在したものと考えられる。

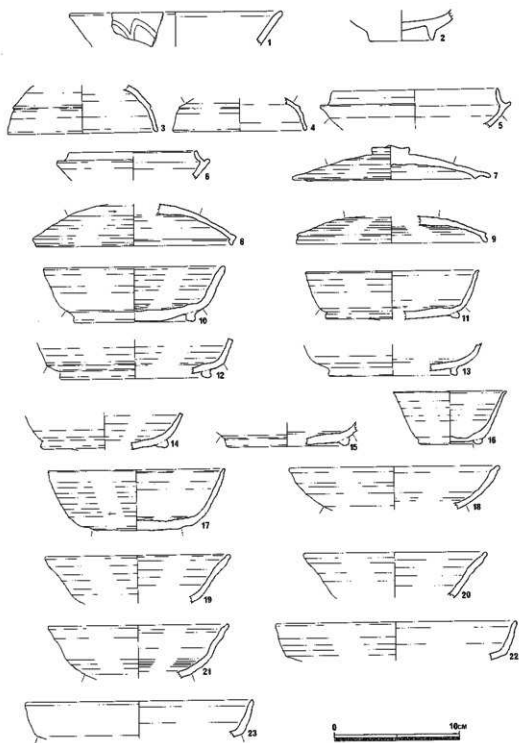
祭祀遺物には、土馬・ミニチュア土器（皮袋形土器を含む）・Y字状土製品等がある。これらの遺物は、第1地点の3B—a—サのポイント附近より北と第3地点の南半分から集中して出土している。ミニチュア土器のなかには完形に近いもの(Na3)もあるが、破片となって出土しているため、これらは祭祀終了後にこの場所に廃棄されたものと考えられる。

今回の調査では、「日根大」と「日」の2点の墨書土器が出土している。「日」の墨書は、過去の調査では出土していない、新出の資料である。「日根大」は、過去8点（推定を含む）出土している。出土地区は、2B区、2C区に限定され、NSD21からは計6点出土している。

今回出土した「日根大」を含め、すべて奈良時代の前半に位置づけられる土器に墨書されている。今回の「日根大」の墨書土器は、現在確認されている「日根大」の最南端に当たる。

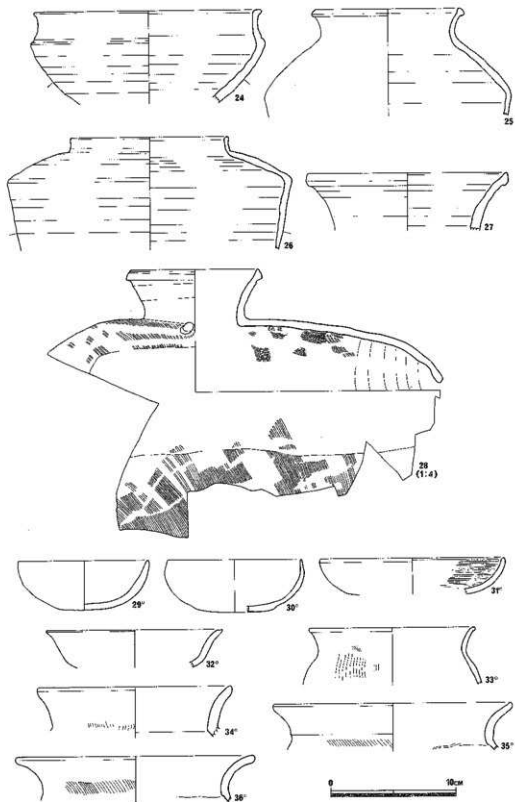
上述の出土遺物・検出遺構は、坂尻遺跡の内部構造を研究する上で重要な意義をもつものと考えられる。

（坂尻遺跡調査員 前田庄一）

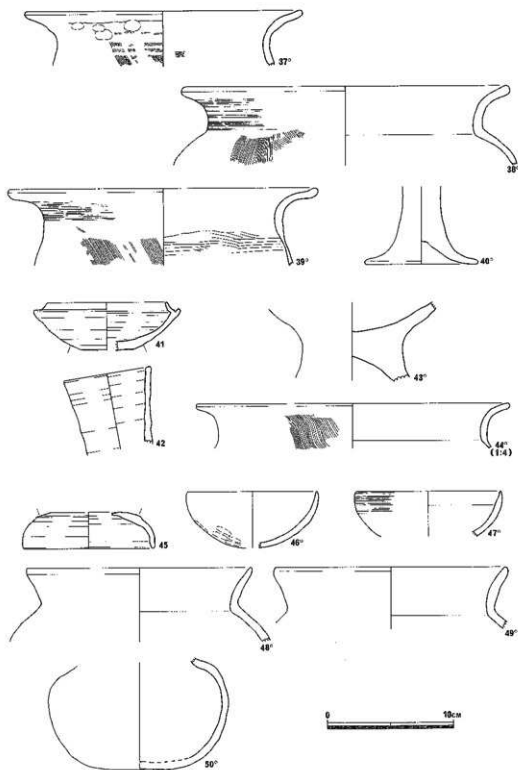


第16圖 出土土器实测图（1）

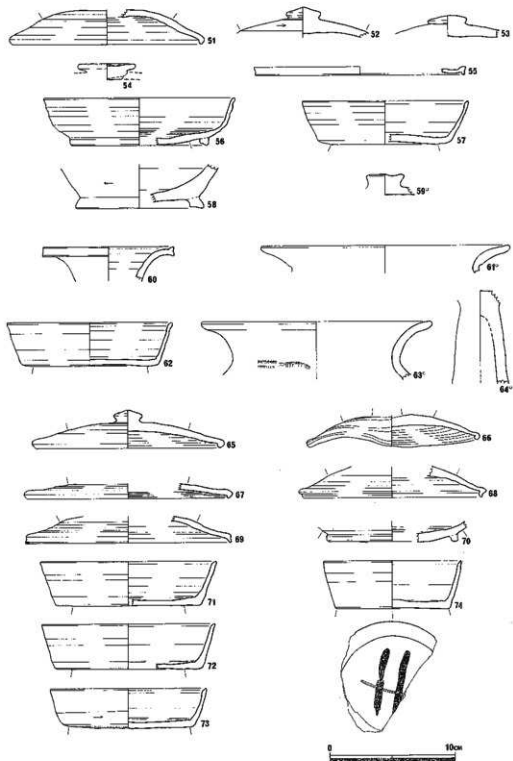




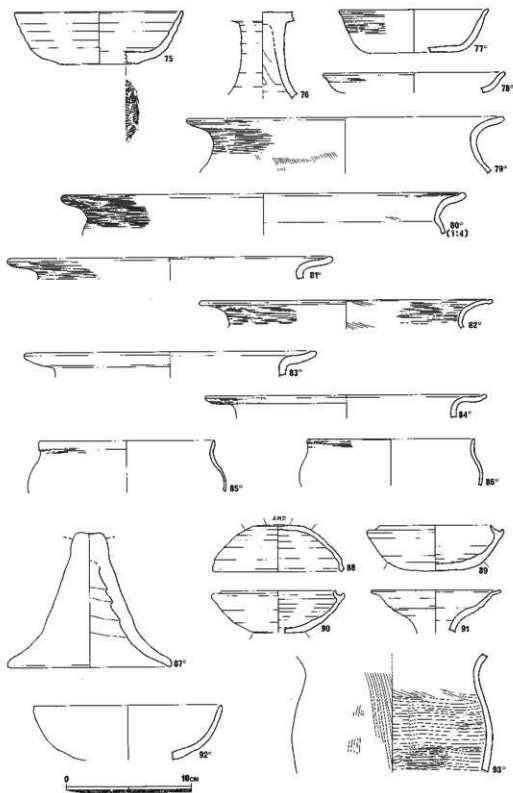
第17图 出土土器実測図(2)



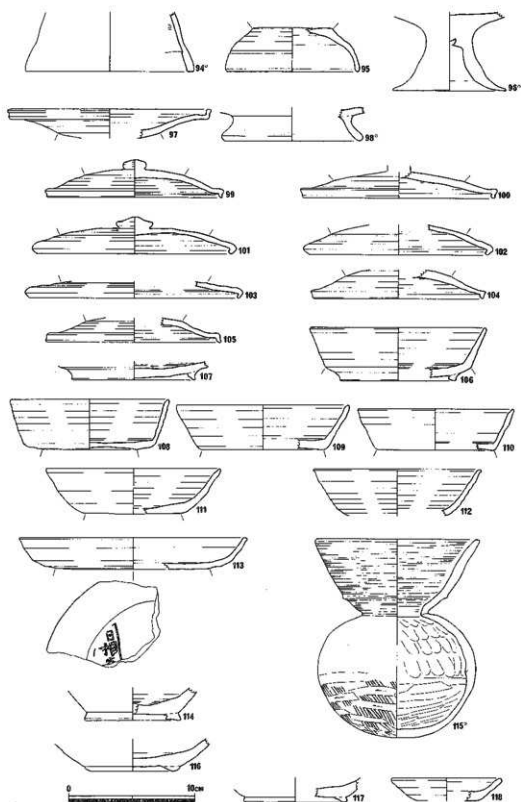
第18圖 出土土器実測図(3)



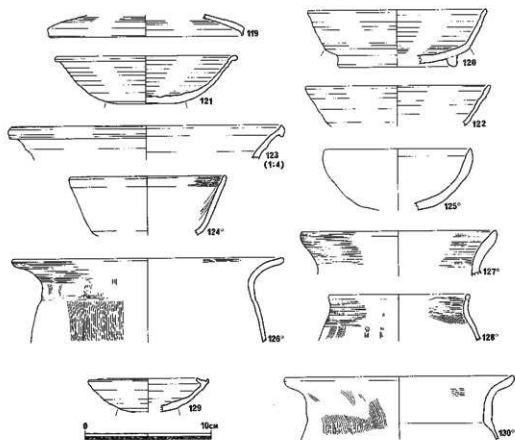
第19図 出土土器実測図(4)



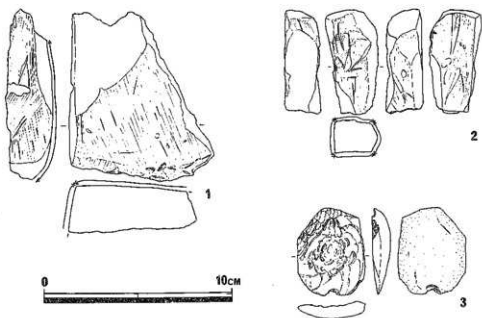
第20圖 山土土器実測図(5)



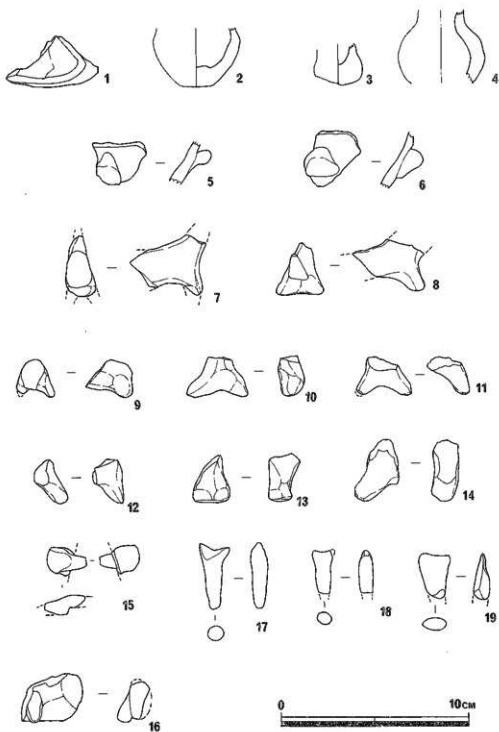
第21圖 出土土器実測圖(6)



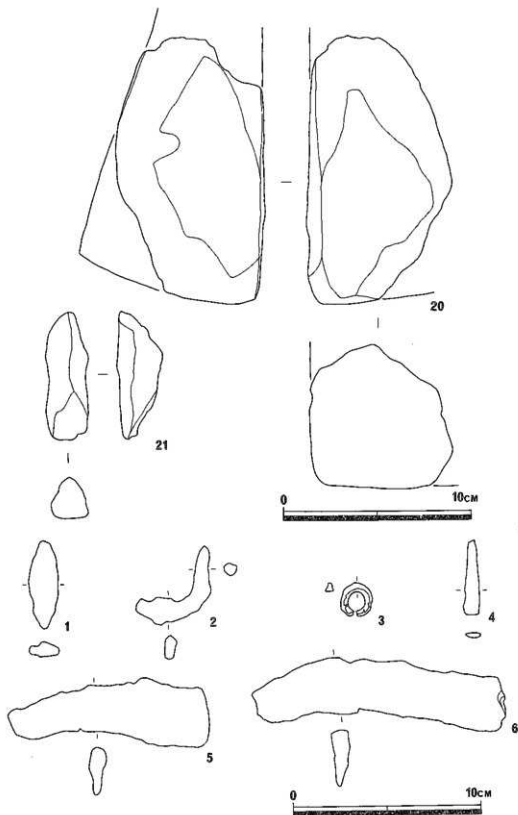
第22圖 出土土器実測図（7）



第23圖 石製品実測図



第24圖 土製品実測図(1)



第25図 土製品実測図(2)・金属器実測図



# 写真図版



(A) SD 5 内遺物出土状況(北より)



(B) SX 1 検出状況(北より)



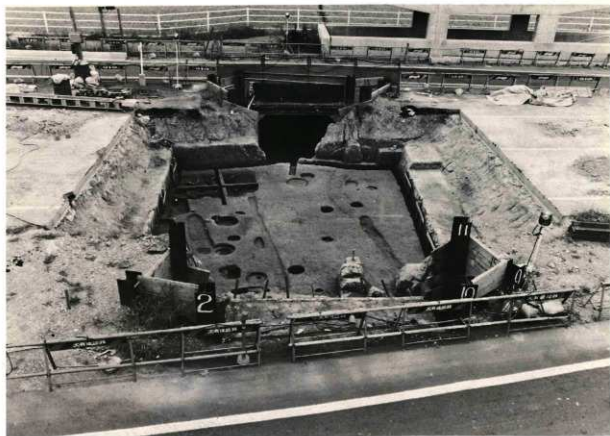
(A) SD 5 内土製支脚出土  
状況 (南より)



(B) SD 6 全景(東より)



(C) SD 6 内礎検出状況  
(南より)



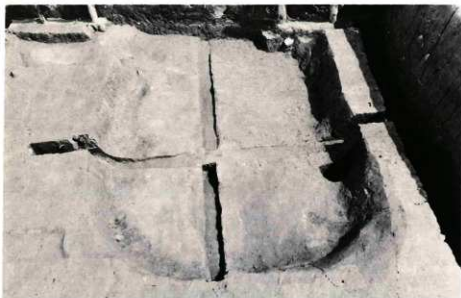
(A) 第2地点第3面全景(北より)



(B) 第2地点第5面全景(北より)



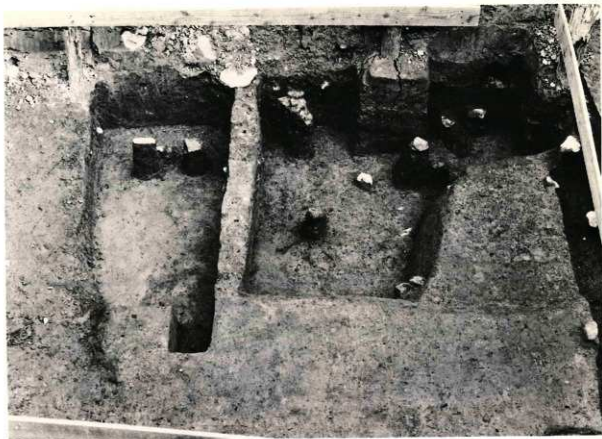
(A) SI 3・SI 4 検出状況、  
録出土状況(南より)



(B) SI 8 完掘状況  
(西より)



(C) SI 9 内遺物出土状況  
(南西より、手前から  
No88. 90. 23-1)



(A) S I 10内遺物出土状況(西より)



(B) 第3地点完掘状況(北より)





7



10



11



17



24



1



2



3



4



5



6



7



8



10



12



13



15



14



16



17



19



18

20



28



104



108



115



29



50



51



65



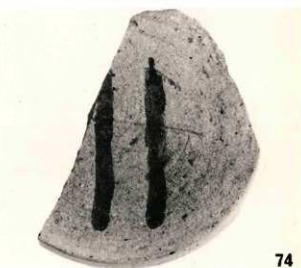
66



73



88



74



113





一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)  
埋蔵文化財発掘調査報告書

坂尻遺跡 —第5・6次調査—

1986年3月29日

編集 静岡県袋井市教育委員会 ©

袋井市国本3070-1

TEL 05384 (3) 2111

印刷 株式会社 開明堂

浜松市中沢町1番1号